【392】

氏　名（本籍）	内藤　栄（埼玉県）（ないとう　さかえ）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博　乙　第　2207　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**舎利荘厳美術の研究－興正菩薩叡尊の遺品を中心に－**

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	中村伸夫
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	八木春生
副　査	筑波大学名誉教授	博士（芸術学）	真保　亨

論文の内容の要旨

著者は，興正菩薩叡尊の遺品である舎利容器を中心に考察をすすめ，舎利塔，舎利容器の「形」は「意味」を有するという仮定に立ち，経疏や儀軌等を通して「意味」を読み取る作業を行い，その作品がどのような舎利信仰に基づくかを目的としている。対象とする作品は，平安時代から鎌倉時代に及ぶ真言密教の中から生まれた舎利荘厳美術が中心である。この時代の舎利信仰について，その主導的な立場にあった真言宗小野流の修法を中心に考察し，舎利法と宝珠法を取り上げて，わが国独自の舎利信仰の解釈を行っている。現在真言宗の舎利信仰の遺産がまとまった形で伝えられているのは，同宗の一派である真言律宗の奈良・西大寺であり，この舎利塔，舎利容器を研究することで，わが国独自の舎利荘厳美術が開花した平安時代から鎌倉時代にかけての真言密教の舎利荘厳美術を考察している。

論文は8章及び付章により構成され，第1章でこれまでの舎利研究を述べ，次いで，第2章で「聖遺物としての舎利」として，飛鳥時代から奈良時代にかけての舎利を納めた塔について，伽藍における関係を論じている。

第3章では「後七日御修法における舎利観の変容」をとりあげ，国家の平安と天皇の健康を祈祷する法要での空海請来の舎利の大壇上に安置した意味について解釈している。

第4章では「小野流の舎利法と宝珠法」について，醍醐三流と小野三流の二派の舎利法について考察し，醍醐三流は舎利を宝珠と同体と見做し，小野三流では舎利は一字金輪の種子ボロンに変じたとしている。両流異なった舎利観を有していたが，舎利を釈迦の遺骨という本来の意味から切り離し，舎利に強力な現世利益を認め，舎利を密教体系の中枢に据えた点では共通していたと結論づけている。

第5章，第6章は「叡尊の舎利信仰と宝珠法の美術」について，密観宝珠形舎利容器（西大寺派寺院を中心に密観宝珠と呼ばれる，立てた金剛杵に宝珠を載せる異形の宝珠が伝わっている。この形式を用いた舎利容器を密観宝珠形舎利容器と呼ぶ）の修法について如意宝輪華法を例に論じ，西大寺鉄宝塔と小野三流の舎利法に関する遺品について考察している。

さらに第7章においても「叡尊の舎利信仰と宝珠法の美術」をとりあげ，西大寺金銅宝塔についてとり上げ，それぞれの舎利法の意味するところを解釈している。

第８章では「如法愛染法と如法尊勝法の美術」について，両法に関連すると推測される作品を挙げ，その特徴を検討している。

また，付章では「天台宗の舎利信仰－中尊寺金色堂と如法仏眼法」と題し，中尊寺金色堂の内部にある三基の須弥壇において，清衡に遺骸を覆う曳覆曼荼羅に仏眼仏母の陀羅尼が書かれていることに注目し，没後の供養に仏眼法が行われたことを指摘した。天台宗では仏眼法は舎利法と関連が深いことから遺骸を舎利として供養したことを推測し，金色堂は舎利殿として建立されたため，舎利荘厳の通例である皆金色とされたと論じている。

以上の考察から，叡尊が造立した舎利塔，舎利容器は小野流の種々の舎利法や宝珠法に用いられたものであるとし，その中には如意輪宝珠法や金輪仏頂法などの密教尊を本尊とした修法も含まれ，多分に密教的な性格を有していたことが明らかとなった。従来，西大寺に伝来する舎利荘厳美術は釈迦への回帰を唱える叡尊の舎利信仰の所産と見做されてきたが，本論文を通してその見解だけでは理解できないことが指摘され，平安時代から鎌倉時代にかけてのわが国の舎利荘厳美術の多様な展開のあり方について論じている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来の舎利容器に関する研究は舎利の形式的な分類が主たるものであった。したがって実際の容器の形式が生まれる舎利信仰の背景について，先行研究ではこれまで考察するものでなく，密教における美術的表象としての舎利容器を十分に論じてこなかったのである。そのため著者は従来の先行研究で充分に言及されてこなかった，器形が表す意味について論じ，その形を改めて解釈することに主眼を置いたのである。

本来，舎利信仰は仏教開祖の釈迦の骨，いわゆる仏舎利の信仰を指し，古代インドからの原初的な礼拝形態を受け継いでいる。わが国に仏教が伝来してのちは舎利を安置した塔による舎利信仰がもたらされたのである。その後舎利信仰は盛衰の差が見られるものの各時代を通じて信仰され，種々の舎利荘厳美術を生み出してきたといってよいであろう。

しかしながら，時代が下るに及んで，密教的な影響が反映し，釈迦を礼拝の中心に据える舎利信仰が次第に形を変え，密教における舎利信仰ではいわゆる仏舎利，釈迦信仰から離れる傾向が修法の上から指摘されている。著者はこのような舎利信仰の変容にともなう舎利荘厳美術を舎利容器の形の変化に見る。飛鳥から奈良時代における塔心礎に奉納された舎利容器の取り扱われ方から離れ，平安時代以降の密教修法における大壇上に置かれる舎利容器について，その器形の変化と修法を関連させて論じたのであった。

特に著者がわが国独自の舎利信仰の遺品として研究の対象としたのは平安時代から鎌倉時代に及ぶ真言密教の中から生まれた舎利荘厳美術で，この時代の修法の中心をなした小野流で用いられた舎利信仰の遺品である舎利塔と舎利容器を中心に取り上げ考察を行っている。そして，その修法に用いられた意味を解釈するとともに，修法が舎利を本来の釈迦の遺骨崇拝という信仰から切り離し，強力な現世利益に基づく信仰の表象と見るに至ったと位置づける。従来釈迦への回帰の遺品と見られていた舎利容器を多様な信仰の表れと解釈し，それを論拠に舎利法，宝珠法で用いられた平安から鎌倉時代に展開した密教工芸としての舎利容器を，信仰と造形との関連において密教工芸史上に明快に位置づけたのである。著者が試みた密教工芸の現れた形を修法の上から解釈する，その造形の意味を読み解いた研究の意義は大きく，これからの密教美術における工芸及び工芸史の解釈，その研究のあり方を大きく前進させるものとして高く評価するものである。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。